

田原正人先生を偲んで

猪野俊平*

昭和44年2月17日、神奈川県中郡二の宮町648番地の田原別邸で御逝去された。

先生は、明治17年(1884年)7月13日の御出生ですから、84才であられたわけで、盲腸炎の持病があられたようですが、他は御元気な余生をおくられ、特に書を楽しんでおられた。

明治42年(1909年)7月、東京帝国大学理科大学植物学科の御卒業で、一高時代からの親友、大島正満先生は同じく動物学科卒、同年7月、同大学院に入れ、故藤井健次郎先生のもとで、桑田義備先生らとともに、植物細胞学を専攻された。大正6年(1917年)の理学博士の学位は、キク科植物の倍数体の研究であることは余りにも有名である。

ところが、先生の大学院の頃、春たまたま三崎臨海実験所へ遊ばれ、ホンダワラ属の生殖器托を観察され、特にアカモクなどの卵放出に週期性のあることを植物学雑誌や同大学の理科紀要に発表されたのが、藻類の興味をもたれた最初であった。大正6年から第八高等学校の教授となられたが、大正10年に東北大学理学部生物学科の創立に当り、助教授になられ、2年間イギリス・アメリカ・ドイツおよびフランスに留学され、帰朝後、教授となられ、生物学第三講座を担当された。その頃、下斗米直昌先生らと、再び三崎にゆかれ、ホンダワラやジョロモクの染色体を観察された。また浅虫に同大学の臨海実験所ができるや、日本海特産のスギモクの卵形成の際の成熟分裂を研究され、また同種の胚発生の研究も行なわれ、更にヒジキ・ウミトラノオの胚発生も観察され、さきの研究のアカモク・ホンダワラ・ジョロモクなどとの比較をされた。

その頃、岡部作一氏にアカモクの細胞学、猪野俊平にホンダワラ属の胚発生、故阿部広五郎氏にスギモクの細胞学と、つぎつぎにその門下生に藻類の細胞学の研究を指導された。中沢信午氏に藻類の細胞学を指導されたのを最後に、昭和21年(1946年)3月、東北帝国大学を停年退職され、同大学名誉教授になられた。

御退官後も、藻類に興味をもたれ、門下生をはげまされ、また雑誌『藻類』にも、時々御寄稿下された。わが国の藻類細胞学の創始者で、藻類学会の名誉会員であられた先生の御逝去をいたみ、ここに御履歴の一部を御紹介する。

* 岡山大学理学部生物学教室

The Bulletin of Japanese Society of Phycology, Vol. XVII, No. 1, 55, April 1969